

## 新涼や家霊棲みたる書架の奥 能村研三

(句集『催花の雷』平成二十七年・角川学芸出版刊)

この句集は「沖」創刊四五周年を祝つての第七句集。能村研三さんと言えば、出発点の〈青林檎置いて卓布の騎士隠る〉というすがすがしい青春歌がいまだに鮮明だ。ほんとうに洒落た句。新しい青春像の意匠がここにはある。

作者の句のいちばんの特徴は、感覚的での確な写生句はもちろんのこと、人懐かしさを感じさせる人間詠あるいは人間関係詠にあらう。すでに第一句集から、〈林檎一つ投げ合ひ明日別るるか〉〈腹を割る話の中に藁がゐて〉〈悪知恵の膨みに似て雲の峰〉など、人間へ寄せる好奇心と観察眼が光る秀品がある。

この人間詠は、〈滝行者鋼佇ちしてゐたりけり『磁気』〉〈坐り皺ついてしまひし良夜かな『磁気』〉〈夏暁の泉のやうな雲は母『海神』〉〈春の暮老人と逢ふそれが父『鷹の木』〉〈天上に父のちからの朴一花『滑翔』〉など様々な位相と変容を見せながら、さらには作者自身への関心も働き、〈寒鯉とわれ遂

にわれより動く『鷹の木』〉〈綿虫に曖昧な顔預けをり『磁気』〉〈聞き耳の耳に及びし冬日かな『肩の稜線』〉などへと句境を広げてきた。

今回の句集にも、〈土筆野に摘み敵来てはかどれり〉〈飛鳥野に催花の雷の渡りをり〉〈泳ぎきり人間くさくなりしかな〉など、さらに人間へのゆとりある心もちが見える。「飛鳥野」の句にも、八雲の上の神と万葉びとの生活を思うおおらかな作者の眼差しを感じる。

上掲句も人間関係詠の発展したかたちとして捉えられようか。この「家霊」は、祖霊というよりも、より身近な父の霊であらう。作者は父親の書斎に住み継いでいるのか、あるいは父の蔵書を多く引き継いでいるのか。いずれにせよ、父親の魂は、書架の奥に慎ましくも爽涼の光を放ちながら作者を見守っていてくれている。作者の精神領域には、この神聖空間が息づいているにちがいない。「新涼」という瑞々しさは、家霊と作者の精神的交流の彩(いろどり)でもあるのだ。

最後に、「沖」十一月号(創刊四十五周年記念号)より。初期の騎士の孤高は、いぜんこの「鷹」に宿っている。

孤高なる飛鷹の空は高貴なり 研三

## たくさんの目玉が乾き終戦日 和田浩一

（平成二二年作、句集『いのち』東京四季出版刊）

句集を繙いていたら〈小雀にパンの耳買う投票日〉に出合  
って、思わずうれしくなった。投票の日でも小雀に与えるパ  
ンを忘れない。小さな「いのち」を蔑ろにせず、共生感覚を  
大切に生きて生きる心のやさしさを思う。

動植物への親近感は、〈酒好きの鼻が恥らい夜の墓〉〈虫喰  
いのほおずきの中ほとけさま〉〈コスモスのゆらゆら私の自由  
席〉などにも感じられる。また、すこし枠を広げると、〈仏像  
にまだ木の匂い夜の臙〉〈丸洗いされ灯台は聖観音〉など、意  
外なものにも「いのち」が吹き込まれる。この流れで出色な  
のは、〈灯のさきに灯を生み春の潦〉の句。ここでは、水が流  
れ出し伸びてゆくたびに、映し出す春灯が伸びてゆく。潦（に  
わたずみ）の水の動きが春灯の「いのち」を押し広げていく  
のだ。

作者の死生観もいたるところに覗かれる。〈一億のひとつ  
の死ですいぬめぐり〉〈死ぬまで未来隠り沼に青葉浮く〉〈逝

くときひとり凍瀧の青光り〉〈地震の地へつづくあおぞら白木  
蓮〉〈枯れてゆくものの明るさ乳母車〉などは、生と死は広や  
かな時空の中で拮抗しながら連続している。

無論、作者にとつて、「いのち」のあり方とは、幼少時の戦争  
体験の記憶と無縁ではあるまい。〈赤蕪の中もくれない開戦  
日〉〈死ぬまでは戦後夕焼け濃き山河〉〈昭和史の暗きに白い  
曼珠沙華〉〈秩父路の稲架掛け小豆戦なく〉などにその一端が  
覗かれる。

さて、あれこれ散策を続けた最後に、冒頭掲出句に触れよ  
う。第一の印象は、もちろん戦争体験の悲傷を抱えて、涙が  
涸れるまで泣き続けた人たちの目である。この中には、「銃後」  
のみならず、無念の中に斃れた戦地の兵たちの目もあるう。  
終戦を思い起こすたびに、彼此の乾いた目が感じられるのだ。  
そして、勇み足かもしれないが、無数の生き物の目も感じら  
れはしまいか。鳥獣、昆虫、花木の目玉……。涅槃図のす  
べての生きものが号泣を尽くした後のように、泣き腫らした  
無数の目玉が集まってくるのである。主格を人間と具体化せ  
ず、より汎用性のある「目玉」と表現した結果の含みかと思  
う

## 暴力の直後の柿を喰いけり 曾根毅

(句集『花修』平成二七年・深夜叢書社刊)

この若い作家については、いつぞや現代俳句協会新人賞選考の折、〈夕桜てのひらは血を隠しつつ〉の一句が印象深く残った。以来注目していたが、昨年ついに第四回芝不器男俳句新人賞を見事に射止め、第一句集を編むに至った。

冒頭の句は、〈立ち上がるときの悲しき巨人かな〉〈何処までもつづく暗黒水中花〉〈冬めくや世界は行進して過ぎる〉などと共に初期のもの。諸作からも、特異な直感の先に暗喩の世界を探っていることが窺えよう。この句には、一読、「暴力」から「柿を喰らう」への転換の中にシニカルな社会批評を感じた。もちろん反倫理的な嗜虐行為の甘美さは反語であり、痛烈な人間批評。句集の扉に齋藤慎爾氏が名鑑賞を寄せている。全くの降参。諸手を挙げて、引用したい。

(前略) 歌人齋藤史の父である齋藤瀏や若き友らが二・二六事件に連坐したとき。史が発表した〈暴力のかくう

つくしき世に住みてひねもすうたふわが子守うた〉を連想すれば、この句の〈暴力〉が、家庭内暴力から学校でのいじめ、さらには国家(支配権力)のそれをも暗示するという拡大解釈を許容するものとなろう。史の歌については「暴力の美しさというものを、これ程までにたおやかに表現した歌は、殆んど他に見られない」という村上一郎のすぐれた指摘が遺っている。」

(句集葉「『花修』断章」)

全体的には、作者の関心は、「死」(タナトス)の多様な浸透と作用に向けられる。〈佛より殺意の消えし木の芽風〉〈さくら狩り口の中まで暗くなり〉〈山鳩として濡れている放射能〉〈落椿肉の限りを尽くしたる〉等。一見明度の高い〈原子まで遡りゆく立夏かな〉も死からの逆照射の作か。ともあれ、今後の果敢な大展開に期待したい。

## 梅天や脳髓に南半球なし 大屋達治

(『大屋達治集』平成二十七年・公益社団法人俳人協会刊)

十一歳で作句を始め、〈せせらぎや蝶がとびこむ家の中〉  
〈くらい水すきとほらせる花火かな〉が小学六年生の時の作  
だというから、この俳人の早熟ぶりに驚く。

達治(たつはる)さんは、山口青邨、高柳重信に師事し、  
学生時代には「俳句研究五十句競作」に連続入賞した実績も  
あるが、「夏草」「俳句評論」を経て、現在は「天為」無鑑査同  
人・「豈」同人。前衛的意識の句風から早い時期に伝統俳句に  
重心を移したという印象を受ける。大変な博識に加え、言葉  
遊びや修辭法を俳句に織り込める達人でもある。

さて、今回、自註付き三百句を改めて拝見して、句の格  
調と巧さに再び舌を巻いた。作者には〈今年竹すでに潮焼け  
安房の国〉など住みなす安房を詠んだ上質な佳品も多いが、  
それよりも〈扇より風がゆくなり畝傍山〉〈下京や箱庭の丹を  
濡らす雨〉〈清瀧のこの蛾採りたしうすみどり〉〈遠州に一島  
もなき秋がすみ〉などの古典的世界を洗い直したような感覚

のよさを見ておきたい。次に、作者の独擅場である機智の冴  
え。〈大山に脚をかけたる竈馬かな〉〈泳ぎより立つとき腕を  
翼とす〉〈陣はなれ衆道を契る真鴨二羽〉〈丹頂の踏みしめて  
ゐる龍の玉〉などにも注目しておきたい。

さらに、作者にとつては大変辛い人生経験かと思うが、  
精神的不安定も含んだ特異感覚の句群がある。〈鱒の尾のご  
とき眉描く十三夜〉〈すすきより手前に捨ててある帯よ〉〈泳  
ぎ終へしわが脂浮く中の姉〉〈灯取蛾を磨り殺しなほ墨を磨  
る〉〈たんぼぼの茎からみえる指の骨〉〈花氷四方に置かれ逃  
げられず〉、〈あめふらし海中に舞ひ梅雨深し〉〈牡蠣も一個  
われも一個の渚かな〉、そして巻尾の〈雁字搦めのなか青き  
もの芽吹く〉。私自身が一番好きな句群でもある。

冒頭に掲げた句もこの最後の流れに入る。精神的に沈鬱  
な折の諧謔句だが、「脳髓に南半球なし」の感覚的断定には、  
作者独自の自他にに向けた笑いがある。気鬱の重苦しさに対し  
て、一旦は「南半球」という明るさを宙吊りにして希望を抱  
かせるが、続く否定辞により南半球は一瞬にして非在化され、  
梅雨空の底により重く脳髓は沈み込んでしまうのであろう。  
作者三十歳の頃の一番印象に深い句である。

草枯れて地球あまねく日が当たり 大峯あきら

(句集『短夜』・平成二六年・角川学芸出版刊)

今年度の蛇笏賞受賞作。大峯氏は昭和四年生まれ。俳人(俳誌「晨」代表同人)、哲学者、僧侶(浄土真宗本願寺派)と三足の草鞋を履き、非常に大きな詩的実感の俳句を生む。

雪空を豊のやうに驚飛ぶと

『宇宙塵』

日輪の燃ゆる音ある蕨かな

『牡丹』

凍る夜の星辰めぐる音すなり

『群生海』

これまでの句集から代表作を引いたが、いずれも想像力に詩的実感が伴い広やかな世界を構築している。「驚」「蕨」「星辰」の根源的な力がありありと見えてくるのである。

「宇宙をそのまま受け入れる詩的直観」と「宇宙の知的分析」という哲学的思索の折合いに悩んだ若き日の苦労は、その後独自の大きな思想になり、感受される世界は宇宙感覚の中で生命の開かれた永遠性を呼び込む。

いつまでも花のうしろにある日かな

『短夜』

草枯れて地球あまねく日が当たり

〃

日輪に触りあるこの大桜

〃

作者が向き合い感受している一風景。そこには、現象を現前させる季節循環的な地球のあり方と、それを包む無限にひらいた宇宙の営みが感じとれる。そして、脱自我により宇宙の永遠性にひらく生命感を伝える作者の俳句のことばは極めて平易である。二句目の冒頭掲出作も、この文脈の中に読み取ることが出来る。

今回の蛇笏賞選者評の中では大峯の作の特徴である「俳句のもつ宇宙性」こそが現代俳句の最大テーマであるという長谷川権の指摘が印象的であった。もちろん、長谷川は「太陽や月を詠んだ句」のみならず、

涼風のとめどもなくて淋しけれ

『短夜』

短夜の雨音にとり巻かれたる

〃

などの大峯の日常身辺詠にも「宇宙性」を感じ取る。両句とも「宇宙的な思いが日常まで浸透している」句である。

ちなみに、石原八束は早くから芭蕉の句、あるいは恩師・飯田蛇笏の〈炎天の山河を蔽ふ宙の濤〉などに宇宙感覚を指摘している。長谷川の「宇宙性」と併せて、「胸中山河」から「胸中宇宙」への動きの高まりを期待したい。

## 涼風や義歯を外せばデスマスク 大牧広

(句集『正眼』平成二六年・東京四季出版刊)

著者のこの第八句集は、詩歌文学館賞・与謝蕪村賞・俳句四季特別賞とトリプル受賞した。私自身、作者の俳句には自嘲風のしよぼしよぼした庶民的味に惹かれてきた。中には、〈仮の世になぜ本気出す花嵐〉と全力疾走をほぐすような句もあるが、作者は脱力のコツを知っていて、たいていの読者は自分に照らし見て安心してしまふのである。

しかしながら、作者は物事の根本から目を逸らそうという訳ではない。〈正眼の父の遺影に雪が降る〉と作者も父の記憶を直視しているではないか。もちろん、この句自体は少々全う過ぎるように感じるが、父の正眼の視線の先には過去が見え、そこに作者の正眼も重なる。雪が包みこんでいるものは過去の思い出だが、戦後、経済優先の価値観が大手を振るようになり、戦争の痛切な反省が変容しつつあるに至っている。その時代の流れの中で、自分の弱みをさらしたふりをしながら

も、ほんとうに自分の大切なものを守る、というスタンスの世渡りなのかとも思う。

その例証のように〈父子草風は黙つて吹くばかり〉〈豆飯や父の生地はダムの底〉〈桐一葉基地の広さのただならず〉があるが、理不尽な社会権力への無力感と怒りを抱え込んだまま傘寿を迎えてしまったところに、作者の自嘲の本源の一つがありそうだ。父親譲りの「正眼」は譲れぬ一線であり、作者の堅持すべきアイデンティティでもあろう。

さて、冒頭の句だが、諧謔の究極は自らの死を笑い飛ばしてしまうこと。老いの現実を卑近な「義歯」に託して、自らの死顔を愛嬌よくさらけ出す。デスは生きている自分そのものだ、と言わんばかりに。ちよつと悪趣味かも。でも、涼しい風の中だから、多少の醜悪もすこやかに見える。〈なきがらや秋風かよふ鼻の穴 蛇笏〉と対照的だ。ややシニカルな笑いの中に読者を引き込んでしまふのが、作者の句の世界である。句集には、命に対する優しさを感じさせる〈蝶生れて山は力を抜きにけり〉〈種芋にやさしく土をかけてゆく〉なども散見される。「正眼」の作者は、ほんとうはこんな朗らかで心なごむ情景を一句でも多く書きたいのかもしれない。

■ 続・らくだ日記 (二十四) 佐怒賀正美 ■

## 燃えおちる燐寸やさしき眼球となり 冬野 虹

(第二句集『網目』(冬野虹作品集・第一卷『雪予報』、書肆山田刊)

四ツ谷龍さんから「十三年前に世を去った作家、冬野虹の遺珠をあつめて文芸作品集として刊行しました」との葉文と共に、全三巻の作品集をいただいた。第一巻『雪予報』は俳句集、第二巻『頬白の影たち』は詩集、第三巻『かしすまりあ』は短歌他。すなわち、四ツ谷のパートナーであった冬野虹さんは、絵画を手始めに、舞踏へと関心がひろがり、いつしか現代詩・短歌・俳句・連句など表現領域を拡げながら旺盛な文芸活動を展開されたのだった。第三巻の年譜を見ても、主に日仏を中心に国際的な活動範囲をされ、各分野の膨大な作品を自らまとめる間もなく他界してしまわれた。虹さんの作品の全体像が見えるまでには、逝去後十年以上が必要だったのである。

第一句集『雪予報』は一九七七年〜八七年の三三七句を収録。

〈鏡の上のやさしくて春の出棺〉(牧神(パン)の神とびそこねたる草の跡) 〈翅に粉雪つもるから岸へすべる〉 〈八重桜廊下

の隅は繭のやう〉(水面のひびわれてゐる菊の家) 〈冬菜買ふ遠い人間そこにここに〉(あしうらは牡丹のふかさきのふけふ) 等に惹かれる。四ツ谷の指摘する「外界の中へ細かくやわらかくひろがってゆく、網目のような虹の神経のつらなりを感じさせる」作品集であろう。

一方、冒頭掲出の句を含む第二句集(未完)『網目』は一九八七年〜二〇〇二年の作品五六九句を収録した四ツ谷編集によるもの。他に、〈石の上のババロア揺れる神隠し〉(月光のほどけおちたる柳かな) 〈柴刈の翁はレモンのやうに働く〉(使者は赤い発疹のやうに夏を来る) など直喩隠喩を駆使したもの、〈蟬の翅この世の端をやさしく押す〉(水底の草に呼ばれぬはるまつり) 〈名を呼べば水玉の中明るみぬ〉(照紅葉きのふすこんと空(あ)いていた) に見るしなやかな直覚の句など、やはり繊細な感性がはたらいている。

冒頭掲出の句は、同じやさしさでも異色である。バタイユの「眼球譚」風の過激を狙った作ではないが、燐寸の燃え尽きる瞬間にやさしいまなざしの「眼球」を感じ取るというのである。自らへの挽歌を意識したような句にも感じられるが、ともあれしみじみと心に残る句である。

■ 続・らくだ日記 (二二三) 佐怒賀正美 ■

## コンビニを怖じる少年春の雨 秋尾 敏

(俳誌「軸」平成二七年四月号)

実は、今月号の「軸」では、まず秋尾さんの評論「鳴弦窓雑記」の方が目に入った。先月、立ち話の折に「俳句」という言葉の初出についての発見の話を伺ったばかりなので、先に着目したのである。簡潔に紹介すると、梅圃の三回忌追善に編集された和装の句集『夜たゝ鳥』(梅痴編・明治八年刊)の序と跋に「俳句」という言葉を発見した、というのである。それまでの初出を遡る発見であった。教示されることの多い記事だったが、詳しくはまたの機会にしたい。ともあれ作者の研究欲には頭が下がる。

さて、上掲句に話題を移そう。これまで「コンビニ」が怖いと思つたことはないのです、意表を突かれた。まったくの死角から不意打ちに遭つた思いだった。しかも、現代を問う彫り下げた視点ながら、文体はしつくりと古典的。

コンビニは、二十四時間営業、店内も多様な必需品が整然と並べられている。お湯ももらえるし、電子レンジで温めて

もらえるし、珈琲も飲める。ATMもあれば、コピーもできるし、宅急便も出せる。トイレも借りられる。利便性の高い現代の「よるずや」である。しかし、よい側面ばかりではあるまい。この句に促され「コンビニが怖い」でグーグル検索してみたら、意外にも十一万件弱もヒットした。人数の少ない空間、深夜の危険性、(店によっては)不良のたまり場だったり、苦手な友だちが店員をしていたり。入った瞬間からカメラで監視されているような気配も怖いか。

この句の少年は、個人的な不都合があったり、心理的に過敏だったり、トラウマがあったりするのだろうか。昔の腕白少年やガキ大将とは異なり、現代社会に入り込めない怯えやすく壊れやすい少年が浮き彫りになっている。

下五の「春の雨」も本来は情緒纏綿な季語だが、ここでは自分の行動半径にさえ怯える少年の繊細な心理を生温かく包むのみである。先行例句的な〈少年のかくれ蓑よ春の雨 中村汀女〉と比べても、秋尾句は今日の社会の歪みのなかに怯える少年の異常心理に焦点が絞られる。その少年に心添わせる優しさと共に、作者の異色作として注目した。

## 一篇の詩の遠きまで蛇泳ぐ 対馬康子

(句集『竟鳴』平成二六年・角川学芸出版刊)

作者は学生時代から中島斌雄、有馬朗人に師事しながら現代詩感覚の俳句を追い求めてきた。すでに、『愛国』『純情』『天之』の句集があり、本書は第四句集。平成十七年から十四年までの作品三六七句を収める。作者の俳句への思いは「あとがき」に鮮明である。

〈俳句という詩は、現実には在るはずのないものたちへ語りかけます。言霊が響き合うとき、人という永遠の孤は、俳句の引き起こす奇跡によって癒され、救われると信じています。そのような純粹な、人の思いを少しでも広げたいと思い、句集名を『竟鳴』としました。〉

俳句を現俳壇のみではなく、非在のものたちへも向けて発する。それは「いま」の生者を含めたより大きな世界(宇宙)の魂たちへと心を寄せることでもある。そのことにより、俳句への思いもより奥行きを持ち、詩想の痩せを防げるので

はないか。私自身は、詩人・宗左近の「縄文」シリーズなどを思い浮かべた。作者にとつては亡くなられたご両親や兄嫁への鎮魂の思いとも重なることであろう。

作品は句集後半によきが出ている。(欠けてゆく月の音して雛道具)〈巢立鳥ひかりの声に呼ばれたる〉〈蓑虫の糸に機影のしかかる〉〈天狼に河が流れて来たりけり〉〈凍鶴や眠りに風の吹く気配〉〈穴を出る蛇真赤なり大地震〉〈蝶々の無灯の町を埋め尽くす〉〈葬灰を流せば泉までとどく〉〈天高し野を船底のごとく置き〉〈写真にはたくさんの息夏落葉〉など、「虚」あるいは「非在のもの」を現代詩的に引き寄せていて、親しく人の心に届く。複合的感覚による宇宙の把握や、造型的暗喩性なども持ち味。

前置きがいささか長くなったが、そろそろ上掲句について触れよう。詩作とは求光に似て遙かなるものを追うこと。我をいざなう蛇は美しい光を返しながら、さらに未知なる遙かな詩の真実を目ざして「泳ぐ」。この句の「蛇」は知の化身か情念の化身か。あるいは詩神の使者かも知れぬ。この象徴的イメージは詩の光をひとすじにまとつて美しい。観念とはかくも美しい奥行があるものかと目覚めさせられた一句である。

■ 続・らくだ日記 (二十一) 佐怒賀正美 ■

## 宿題はやりかけ林檎かじりかけ 由利雪二

(句集『宿題はやりかけ』平成二六年・東京四季出版刊)

作者は臼田亜浪系の俳誌「からまつ」主宰。今は退職されているが、養護学校はじめ障害児教育の現場で力を尽された。本句集の成立については、あとがきに「中学校から肢体不自由養護学校という未知の世界に入った。それは遙かな昔、気がつくまで階段の梧葉すでに秋声。子どもをモチーフにした作品集を纏めることを思い立った」とある。章立ても「一学期」「夏休み」「二学期」「冬休み」「三学期」「春休み」「心身障害教育歳時記」「ちひろの絵」と独自の視点がある。特に多様な子どもの情景を教師と子どもの複合的な視線でとらえた句に秀品が多い。

さて、冒頭の句。子どもの困った現実を宿題と林檎の二つに代表させて提示している。描く視線には、男教師としての微苦笑があり、すぐに叱り飛ばさず一応の理解を見せる包容力を感じる。それは、この子の仕様のない行動に昔の自分を重ね見ているからでもある。作者自身、友だちと自然の

中で無心で遊ぶ少年時代を過ごし成長したから、子どもの遊びたい気持ちがよく分かるし、子どもの本領は遊ぶこと、と弁えている。喧嘩しながらもたっぷり遊んだ子どもは悪くなんかならない、と。

一方、(多少の勇み足かもしれないが、)この句は、晩節を意識した作者の自嘲的かつ楽天的な暗喩とも感じ取れる。それは「宿題」「林檎」の意味性の深さによる。人生の宿題も、林檎に見る生命燃焼も途中。でも好きな俳句に熱中して遊んでいるし、いつかは宿題も片付けるさ・・。

すなわち、この句には、眼前の子どもの現実、作者の少年時代のありさま、そして現在生きている姿勢が、「遊びせんとや」の童心を軸として三層の重なりを見せている、とも読めそうだ。常に子どもから逆照射を受けて生きてきた作者らしいユニークな句だと思う。

他にも、〈もう寝よの三度目の寝よ蛍籠〉〈茸狩苛めたあいつまで連れて〉〈雪散るや畏かけに行く六年生〉〈年始まるこの児も向い風が好き〉〈先生が声足して九々雲の峰〉へりしを春の下校の肩ぐるま〉他、教師と生徒の懸命で情の熱い交流が印象的。気持ちの温かくなる句集である。